



中友会

[発行所]

中友会

港区西新橋1-22-13
全日本中学校長会館202号室
東京都中学校長会事務局内
TEL 03-3504-8705
FAX 03-3504-8706

会則第2条



親睦



互助



生涯学習

<http://chuyu-kai.org/>



体験に学ぶ

中友会副会長 須永一男

「ヨッチャンが牛乳を飲んだよ」隣席の女子の感想文の書き出しである。ヨッチャンは小学生の頃から牛乳が嫌い一度も飲んだことがなかった。それが体験学習の後から急に飲むようになった。その驚きを書いたのである。なぜ急に飲むようになったのか訊いてみたそうである。すると「あんなに大変な思いをしてやっとできたものを捨てることなどできなくなった」と答えたそうである。

実はヨッチャンはある酪農家にお世話になった。朝から牛舎の糞の清掃をし、敷き藁を交換し、昼食後は乳牛の体をきれいにし搾乳室に入れ、搾乳した。大きくて重くて、思うように動いてくれない牛を、やっとの思いで搾乳室に入れる。湿って重い糞をスコップで一輪車に載せて運ぶ苦勞。しかしそれだけではない。若い酪農家の夢や情熱、心意気に触れたことも「牛乳を捨てられなくなった」大きな理由に違いない。

子供たちに体験学習をさせたいと学年主任が申し出た。企画する中でできるだけ本物をとということになった。その思いにも私も全く同感であっ

た。

毎年、三年生の一人一人と面接をする。その中で希望する職業や夢を聞いてきた。答えは、女子は保育士、先生、看護師、ペットシヨップの経営。男子はサッカーか野球の選手が圧倒的に多いことに歯がゆさを感じていた。これは情報の偏りや直接体験の少なさに原因があるのではないかと常々考えていた。そこで、観光客相手の牧場や農園は極力避け、農家などの生産現場で、一作業員として働かせてもらおうということになった。

現地の役場や農協を訪問し、農家等を紹介していただいた。幸い、趣旨をご理解いただき、稲作農家、花卉栽培、カーネーションやバラ、ランなどの栽培、野菜や椎茸栽培、酪農家や競走馬の飼育牧場等々、多くの協力者を得ることができた。

協力者の多くは、都会の子が本場に一日作業できるのか心配していた。ヨッチャンがお世話になった酪農家も牛舎の臭いを気にされていた。しかし作業が始まると子供たちは嬉々として働いた。

昼が近づくころにはどの生徒も作業の要領を得てきびきびと働けることになった。作業がうまくいくと褒められる。褒められるとやりがいが出る。このようにしてどの生徒も貴重な体験をさせていたことができた。ラン栽培の農家で黙々

と作業をする女生徒を見ながら「お嫁に来てくれる人が出てくれるかしら」と呟いた奥さんの言葉が忘れられない。農家だけに、また農家の悩みもあることを知らされた。

ある農業協同組合が都会の若者に呼びかけて漁業の体験をさせたというニュースを聞いたことがある。髪を染めた若者たちが集まったそうだが、その中からかなりの定着者が出たと聞く。実際に触れて身体で感じる事が大切であることを物語っているように思う。

情報化社会である。パソコン、テレビから膨大な情報が流されてくる。目や耳からだけの情報で、汚い、危険、と避けてしまいう傾向はないだろうか。液晶画面からは山の冷気も、潮の香りも伝わってこない。ゲームの中の戦いは、人を傷つける恐ろしさまで思いは至らない。人の体温を感じることはできない。

人が他の動物と違うところは、「言葉を使える」「道具を使える」「火を使える」ことだ、と習った記憶がある。今、そのどれもが危なくなっているのだろうか。言葉は乱れ、道具がなくても困らない。ボタン一つで煮炊きもできる。しかし、便利な生活も基礎的、基本的技能を身に付けた上でのものであってほしい。防災意識の高まりもあって防災用品を備蓄する家庭も増えているように思う。ただ、ライフラインが止まった時に、どれだけの人がそれらを活用し、生き延びることができているのか心もとない。防災教育にしてもキャリア教育にしても、身体で、肌で感じることを基本にしたい。それを伝えることが私たちの使命かもしれない。